

グローバル人材に必要なもの

熊本 真大
Masahiro KUMAMOTO
機械システム工学科 3年

1. はじめに

国の垣根を超えて人や資本が流動するグローバル化の動きはますます強まっている。国内の企業だけがライバルである時代は終わり、世界中の企業と競争し勝ち残らなければならない。そのためには世界を視野に入れ広く物事を考える力と、どこでも通用するスキルを持った人材が必要とされ、このような力を持つ人材がこの先を生き残っていけると考えた。そこで、海外を視察し、現地でインターンシップを行うことでこれらの力を養えると考え、グローバル人材育成プログラムに参加した。

海外で2週間の実習を行う中でいくつかの課題に遭遇し、そこから語学力を始めとするコミュニケーション能力の必要性と、世界を意識した製品開発の必要性を学んだので報告したい。

2. 実習の内容

サンノゼにて製麺工場を営む Nippon Trend Food Service 様にて2週間の実習を行った。ここではラーメン店で使用される麺を、オーダーメイドで作成したり、アレルギー患者向けにグルテンフリーの麺などを製造したり、している。午前10時から午後3時までは、工場内で主にヒスパニック系、すなわちメキシコ系アメリカ人の方々と製麺の手伝いを行った。麺の材料を機械で混ぜ合わせて生地を作り、麺帯という帯にした生地を、機械でロール状にまとめ、発酵させる工程である。ここでは常に先の事を考えながら行動しなければ作業の流れについていけず、頭と体を使う作業であった。また、従業員一人一人がどの仕事ができるのかをまとめたワークリストの作成を行った。まず、どの仕事ができるのかという質問をスペイン語に翻訳した。次に、従業員一

人一人に質問を行い、実際にその仕事が出来ているか確認後、ワークリストを作成した。午後3時から午後6時までは、担当の技術者の方から工場内にある機械の構造・仕組みの解説や、機械のメンテナンス、修理の方法を指導して頂いた。長時間稼働し続ける機械を、毎日点検し、不足箇所にはオイルやグリースを施すことで、格段に寿命を延ばすことが出来る。メンテナンス漏れを防ぐためにメンテナンスリストの作成を行った。部品ごとに点検の頻度が違うため、その頻度毎に点検項目をまとめ、日々のチェックが行いやすいように改良した。また、ベアリングなど、故障した部品の交換を行った。予備のパーツや、予備が無ければ規格に合うものを現地で探した。修理以外にも、包装機の排出口にプレートを取り付け、包装された麺をスムーズに排出出来るように改良を行った。他にも、使い方が分からず使用されていなかった、特注の厚み測定器の使い方を模索した。このスケーリングメータの説明書を見つけ出し、この装置の使い方が分かったのは良かったが、その測定器は麺厚を測定するには不適切であることが分かった。最終日にはプレゼンテーションの機会を頂き、実習内容や学んだこと、実習を通して見つけた問題点などを従業員の方々の前で発表を行った。

3. 実習先で学んだこと

私はアメリカで使用される言語は全て英語だと思い込んでいたが、工場内での労働者の方々はほとんどがメキシコ系の人々であり、ここで飛び交う言語はスペイン語であったため、話している内容が全く分からなかった。彼らとスペイン語で会話する必要があるため、実習先の企業では通訳の方を雇いコミュニケーションを取っていた。しかし、ただ単に通訳の方を置くだけでは十分とは言えない。たとえば現場で彼らがミスや、誤った作業を行った際、コミュニケーションをしっかりとって、彼らが理解できるまで注意や説明をすることが重要である。こうした必要な指導を怠っていると、再発を招くこととな

り、さらには上司との関係を曖昧なものとしてしまう。これらが続くと社内の規律や風紀を乱す原因にも繋がる。また、機械を正しく使うことの重要性を理解してもらわなければ、今まで何事もなく動いていたのだから問題無いという考えにより、誤った使用を続け、機械の不調や故障に繋がることもある。

麵を圧延する際に使っていた機械のサイドパネルの写真を以下に示す(図1)。この写真の丸で囲まれた箇所はネジが無くなっている箇所である。これは従業員の方が足りないネジをこの機械から抜き取って使用してしまったために起こったことであった。さらにネジの規格は日本と海外では異なるので、そのことを知らずにネジを替えようとしたためにネジ穴が潰れてしまう事態が起こっていた。これだけではなく、粉をミックスする大型の機械のネジも抜かれており、それぞれのネジの果たす役割を理解せずこのようなことが続くと、機械の強度が下がり故障や事故に繋がる恐れがある。

機械の修理に日本から技術者を派遣してもらおうと渡航費や滞在費も含めて支払うため、数十万円の費用が必要となる。また現地の日本製機械の知識がある技術者に修理をお願いする場合、アメリカでは専門職の person 費が日本よりはるかに高額となるため、いずれにせよ多額の費用が必要となる。そこで会社



図1 サイドパネル

専属の技術者を雇って修理を行うことも考えられるが、アメリカでは人材が不足していることに加え、日本から技術者を連れてくるにはアメリカの就労ビザを申請しなければならず、大抵の場合受け入れ企業側が数十万円の費用や手続きを行わなければならない。

これらの問題に対しての改善法を考えた。まず1つ目のコミュニケーションの問題については、従業員のスペイン語学習の必要性や、職場内での役割の認識不足を補うためにネームプレートを作成することを提案した。2つ目の機械の問題については、機械に国際規格を積極的に使用していくことで規格の違いを無くし、修理にも今のような手間を減らすことが出来ると考えた。

4. まとめ

海外で2週間の実習を行うことにより、日本で生活しているときには考えられなかった問題を発見することが出来た。そこからグローバル人材に必要な2つの力や考えが得られた。1つ目は自分の考えを相手に理解してもらう力であり、語学力もその一つである。コミュニケーションを取るには言葉を使い十分に説明し、理解してもらう必要がある。さもなければ本当にコミュニケーションを取れたとは言えず、お互いの意識にすれ違いが生じてしまう。すなわち誰であれ自分の考えを相手に理解してもらえるように説明する力が必要となる。2つ目は、日本にとどまらない広い視野を持つこと。グローバル化が進む世界で生き残るためには、海外で使用されることを意識した製品を作らなければならない。使いやすく、部品が容易に手に入り、修理やメンテナンスのしやすい製品こそ、今後のグローバル社会で生き残る製品である。私が海外実習で学ぶことの出来たこれら2つの力こそがグローバル人材に必要なものであると考え、この報告を終える。